

オヤジもおだてりゃ空を飛ぶ。 そして怪我をする

恵庭市医師会
我汝会えにわ病院

きむら しょういち
木村 正一

痛い！ 自分の右手首をじっと僕は見た。どうやら、橈骨遠位端骨折にはならずすんだようだ。ちょっと安堵し、またもくもくとレンタルボードを小脇に抱え、約30メートル上っては、また滑るという単純作業を繰り返していた。滑るといっても、全くのスノーボード初心者、2～3メートル滑っては転び、また2～3メートル滑っては転びの繰り返し。そのたびに臀部や手を強打する。両手母指CM関節は悲鳴を上げていた。尻には、初心者ボーダー用パッドの中に、タオルを重ねていて良かった。これがなかったら、きっと坐骨々折または、第一腰椎破裂骨折が起こっていたかもしれない。教科書的には、上肢の怪我がスノーボードに多い。その理由が文字通り痛いほどわかった。だいたい、女の子にもてるからスノーボードやろうよ、俺が教えてあげるからさ、と言っていたD先生は、わずか30分弱のレクチャーの後、とっくにリフトに乗り遥か山頂に行ってしまったのだ。いい歳こいたオヤジが年甲斐もなく、ボードなど始めてみじめな姿を晒している。周りの人たちは、そんな僕に目もくれないだろうが、当の本人は転ぶたびに、他人の嘲笑があるのではないかとびくびくしていた。ちっくしょー。1997年末のことだった。

これを、3日連続繰り返した。すると、どうにかこうにか様になってきて、なんとかリフトに乗って上から下まで滑ることができたのだ。これは結構面白いじゃん。早速、スポーツ用品店に行き、板、バインディング、靴3点セット39,800円を買った。独身の若い研修医N君はBurtonの、K君はSalomonの高価な板を誇らしげに持っていたが、スポーツは道具じゃないのだと、やせ我慢して国産の板（中国産か？）を大切に持った。それまで、長い北海道の冬が苦痛だった。しかし、ボードを知ってからは、退屈しのぎができて楽しかった。仕事が終わって、ナイターに連日通った。ナイター券1,000円。ゴルフに比べたらなんと安価な娯楽なのだろう。

ボードにはゲレンデをただ滑る以外にいろいろなバリエーションがあった。滑りながらくるくる回ったり、反対に滑ったり技を楽しむグラウンドトリック。レールやboxをすべるジブ。ふかふかの新雪を楽しむバックカントリーなど様々だ。なぜか、僕は初心者の頃から飛ぶことに憧れ、執着していた。いわゆるワンメイクというジャンルだ。最初の頃は、ゲレンデにある小さいこぶを飛んでいた。そのうち、

キッカーと呼ばれるジャンプ台も体験することになった。YouTubeなどない時代だから、本とVHSが教科書だった。ヘルメットもしてなかった。ボード上級者のMRさんを、職権を乱用して無理やりジャンプの師匠に祭り上げ、教を乞うていた。その彼が頭を強打し、ここはどこ？私は誰？などと真顔で言い出した時は、かなり肝を冷やしたものであった。

キッカーに並んで飛ぶ順番を待っていて、僕の番がくると若い子たちは、40歳間近の僕に敬語を使ってくれるのだよ。派手なウェアとゴーグルなどで誤魔化しているつもりでも、所作や雰囲気歳がばれてしまっているのだなあと、かなり悲しい思いもした。

若くて可愛い女の子が見ていると（本当はゴーグルで可愛いかな否か不明）、なんでも飛べそうな気がしてくるのだ。全く阿呆である。豚もおだてりゃ木に登る。オヤジもおだてりゃ空を飛ぶ。ある時、バックサイド360という、できもしない技に挑戦したとき、360度廻り切らず270度で斜面に対して、真横に着地してしまい、恐ろしい衝撃が僕の左膝を襲った。脛骨に異常な前方引き出し力が加わったのだ。「バキ！」なんか、嫌な音がした。前十字靭帯付着部剥離骨折だった。受傷直後はあまり痛くなく、滑って下まで降りて来られたが、徐々に膝関節に血液が溜まると、異常な苦しみ襲う。これも教科書通りだ。さすがに、自分でプンクする勇氣はなく、研修医のS君にお願いした（ちゃんと注射の仕方教えておけば良かった）。整形外科医はピンク針を無麻酔で打つ、とっても乱暴な奴らだ、という消化器内科K先生の意見は最もだと思った瞬間だった。痛いよお！

不幸中の幸いだったのは、僕の恩師であり、膝靭帯分野の世界的な名医であるY先生に執刀していただけたことだ。あれから、20年以上経ったけれど、外傷後OAにならず、僕の膝はまだもっている。本当にありがとうございました。

還暦を過ぎた今でもボードをしている（もちろん今はただ滑るだけ）。最も困っているのが20kg以上増えた体重だ。腹の脂肪が邪魔をしてなかなかバインを締めるのに苦勞する。Burtonからstep-onという便利なものが売りに出されているのだが、専用のブーツも買わなければならない、その高価さに躊躇しているうちに、春を迎えるのであった。